

世說新五子篇

831-2 (7)

俳諧資料カード

年代

天保二

編者  
(筆者)

遠村木村 花  
日蓮寺住持

書名

世說新五子篇

備考

(下垣内蔵)。







近世流り如く程のまじき求むに可し  
きにけりやあつちうふと斗ふ太鼓並村  
ま青羅漢坐圃文れみ子あづいつまもけり  
お直とくまきまももんてまよ上る  
ぢうしんまのううまももんてらうまお  
はしよりまあまのまくーれままみ  
まよまらうまよままままのま  
を浪ままのまーまー圃文れまハ

おののままおあやまもハーま  
作まてまみ子の発まままのま  
うたまもまままはまま右れ  
まままままおあまのまま  
おまままままままま  
ふみあま人のまままま  
ままままままままま  
人は願らままままま





齋

その茶室よこ編のほま出物

廿五の負振

廿六の負振

廿七の負振

廿八の負振

廿九の負振

三十の負振

三十一の負振

三十二の負振

三十三の負振

三十四の負振

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

節

節

節

節

節

節

節

節

節

節

節

節

節

節

節

節

節

節

節

節

節

節

節

廿五の負振

廿六の負振

廿七の負振

廿八の負振

廿九の負振

三十の負振

三十一の負振

三十二の負振

三十三の負振

三十四の負振

三十五の負振

三十六の負振

三十七の負振

三十八の負振

三十九の負振

四十の負振

四十一の負振

四十二の負振

四十三の負振

四十四の負振

四十五の負振

四十六の負振

四十七の負振

四十八の負振

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

福寿

廿五の負振

廿六の負振

廿七の負振

廿八の負振

廿九の負振

三十の負振

三十一の負振

三十二の負振

三十三の負振

三十四の負振

三十五の負振

三十六の負振

三十七の負振

三十八の負振

三十九の負振

四十の負振

四十一の負振

四十二の負振

四十三の負振

四十四の負振

四十五の負振

四十六の負振

四十七の負振

四十八の負振

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太





曉基

吹あきて井の中よりいりし柳  
 枝よれて杯の海にうきまき  
 ち力の揚よふけうけで降りて  
 まま枝よらぬのさうらばれら  
 のしんと枝よりつゝま  
 やまけし煙をうきむ柳うき  
 灯とくし油うけし枝うき  
 煙帯をぬ村の枝よるうき  
 ふうりてまきうきゆき枝うき  
 柳おや柳の中枝よるうき  
 柳のまきうき柳帯門の内

蘭文

落基

芥

松若緑

花活よ二寸短しきき

之舟おあらしうやそぬのま

大まきをさきて昔しぬき

若枝よせいしうき落枝

芥のまや揚あしうき泥

古るよりうきまき松芥

家新のまおまきつまむ田井芥

芥まきよしうきまき

皮ひいて種多き入江の若角

えんまきうき夕ほらぬ若角

うきうきうきうきうき

太 我

太 我

太 我

太 我

太 我

太 我

太 我

太 我

太 我

松の花  
海苔

和布  
鶯

春は秋もたはちうろとまつめ花  
 海苔すふふの一二三や春は白  
 らい海のついで江戸染は白ひうれ  
 まる海苔や江戸染は白ひうれ  
 まよれ戸や二見のついで白ひうれ  
 江戸へやまの春や海はうれ  
 うらやれや染のうらやれ  
 春は秋もたはちうろとまつめ花  
 まよれ戸や二見のついで白ひうれ  
 まよれやまの春や海はうれ  
 鳥来て春の染はうらやれ

春村  
 春村  
 太枝  
 草村  
 春村

春は秋もたはちうろとまつめ花  
 まよれ戸や二見のついで白ひうれ  
 まよれやまの春や海はうれ  
 鳥来て春の染はうらやれ  
 うらやれや染のうらやれ  
 まよれ戸や二見のついで白ひうれ  
 まよれやまの春や海はうれ  
 鳥来て春の染はうらやれ

春村  
 春村  
 太枝  
 草村  
 春村







少し市ハ灯なり寸実やゆふさあ  
 脊のひくき馬工字よりぬる  
 碁文より唐人座を叩く  
 けり 芝や眼のめくろく  
 う根ちてまき妻の子や夕ぐれ  
 尚くもてまきをさす 灯とくめ  
 魚つくとまあくぬる二日  
 ハまきあはるるていきまぬる  
 ち度ちたてまき紫のよほい  
 ゆふさや夜のおろくをうらぬ  
 けり 白や露宿し松の中

、 芝村

、 芝村

、 芝村

、 芝村

、 芝村

、 芝村

長閑  
 春宵  
 春夜  
 吹矢ふくくまきりう整法の未  
 るう啼や梅はうつれうま  
 ゐくれと梅くまきりの夕ぐれ  
 ち采まにまきりの神社の  
 と休まて人と語りやまきり  
 ちまきりや女を怖れけり  
 ちまきりやういと持たし  
 ちのちやうばあふまきり  
 ちまきりやうあふまきり  
 ちまきりやうあふまきり  
 けり 白や露宿し松の中

、 太武

、 太武

、 太武

、 太武

、 太武

春月

浅川の末ありやうし暮の月  
大空よりかろくうのくろく月  
くささかハ煙こころし暮の月

暮  
暁

余寒

まきく茗の折ふし畱くま  
情さふ拾針と余きくうま  
冥の戸の大注ちいさき余き外  
軽答は余をいさす令うま

暮  
暮  
暮  
暮

如月

如月又えつくとまきのくきり

暮

初午

初午やよの口ろむし一のそ  
初午や人こころくハいかり百  
初午やよも桂し人のこえ  
ちろゆく枝影をやわらん像  
わらん今とまてもくくハ一のそ

太  
太  
太  
太

涅槃舎

傾城のぬくくわふわらん  
わらん今や教録し謀と啼鳥  
わらん今や下アア中もまね山

暮

彼岸

古寺や洞よりわらん 像  
起くより人々や嘆ふいんわ  
斤痛しわいん像と文ふり

暮  
暮  
暮  
暮









田螺

ねく時ふくたきまの陸を  
 うきまてきくし陸の如  
 おろくそひふまよふ陸は  
 田の如のこころもかきま  
 果をやくもかきまなりては時  
 陸まよふまよふなりては時  
 陸や田の如くもかきま  
 争ひ陸もかきまなりては  
 心もかきまなりては時  
 田の如くもかきまなりては  
 揚土のふくたきまの陸を

茅村  
 太我  
 太我  
 茅村

新木

猫恋

ねく時ふくたきまの陸を  
 うきまてきくし陸の如  
 おろくそひふまよふ陸は  
 田の如のこころもかきま  
 果をやくもかきまなりては時  
 陸まよふまよふなりては時  
 陸や田の如くもかきま  
 争ひ陸もかきまなりては  
 心もかきまなりては時  
 田の如くもかきまなりては  
 揚土のふくたきまの陸を

茅村  
 太我  
 太我  
 茅村

紅毒



焼野

獨活 山葵 止厥 菜花

野を焼や荒れを成生れたる火  
よの焚くとも今や火より焼や荒れ  
かろくや焼やのすもれまもろ  
川裁てを好んて好く焼や外  
うやまよ花を火を折ひらう  
山葵あつて信より尊幸キお  
わひ採て好んて洗ふひらう外  
負ひよよわひおていもせろ  
わひのむやよ女下を向のや  
世も花をよ信の侍は女下を  
わひのむやわね泉にわひ小まひ

太我 喜村 菜文 太我 喜村 太我 喜村

几巾

るよろくり紙葉の花のゆらうれ  
かのむやまろり 葉のく  
わろくくもの葉も花はまろり  
わの花はまろり よほみやを  
きの花の火月を信くくわろり  
葉もむよ兔の身ははわろり  
わの花や女下を好むのむら  
ろのむや女里をよまもろり  
るよろくろくろくろくろくろく  
山葵まもろりよ城下や几巾の敷  
わろくろくろくろくろくろく

太我 喜村 菜文 太我 喜村 太我 喜村

切つておぼろしくかきまわす。おぼろしく  
おぼろしくおぼろしくおぼろしくおぼろしく

弥生

曲水

雛

大佛おぼろしくかきまわす。おぼろしく  
曲水おぼろしくかきまわす。おぼろしく  
雛おぼろしくかきまわす。おぼろしく  
おぼろしくおぼろしくおぼろしくおぼろしく  
おぼろしくおぼろしくおぼろしくおぼろしく

鶏合  
汐干

寒食  
鞆鞆  
安良居花

鶏合おぼろしくかきまわす。おぼろしく  
汐干おぼろしくかきまわす。おぼろしく  
寒食おぼろしくかきまわす。おぼろしく  
鞆鞆おぼろしくかきまわす。おぼろしく  
安良居花おぼろしくかきまわす。おぼろしく



炉塞 蚕

結田結結は急な響くうれ  
 炉さかや若おきく人の儀も吃  
 葉うらしの穢ね何ふ蚕うね  
 蛸結ふは花より切り春時  
 春何ふ女や古き影くしる  
 針柳の灯の点し蚕時  
 と年より蚕けしえぬ小百姓  
 わさきん遠とを何も葉子引  
 地信色一枝了や柳の花  
 思ふと夏代えねく平糶の也  
 交へ打てふ花くくわしきよ

太誠

善村

善文

太誠

善村

桃

花

吟てあて牛よりけり柳の也  
 雨牡丹や春よきよと花や中  
 柳らやりあきもぬればつる  
 色は 赤しより吹くも花  
 月よよき帯さきもる柳の可  
 春戸門のわらぬ葉や花の花  
 見つきて花をよはう物もれ  
 口くく花のほまや花さうり  
 花さく柳うちききゆのさ  
 石さるる花よ花れさうり  
 花さくお男はらうとさきわし

善文

善文

善文

太誠

善村





山吹

山吹や葉よむよ葉よむ花よむ花よむ

太我

山吹を飾きしきくおよそ

山吹や世をくくく入らる

草けよふ草けよふのたけしあうぬ

山吹や花よむくわう花の信

花よむ入らる花の岩同よ

山吹や花よむしきま川鳥

山吹の花よむしき輪のうぬ

連翹や葉母衣の花好むを町

花よむしきしき花のたけし

花のたけしきしきしきしきしき

連翹  
小藤

太我

董

董よむ董よむ董よむ董よむ

董よむ董よむ董よむ董よむ

董よむ董よむ董よむ董よむ

董よむ董よむ董よむ董よむ

董よむ董よむ董よむ董よむ

董よむ董よむ董よむ董よむ

董よむ董よむ董よむ董よむ

董よむ董よむ董よむ董よむ

董よむ董よむ董よむ董よむ

董よむ董よむ董よむ董よむ

董よむ董よむ董よむ董よむ

董よむ董よむ董よむ董よむ

太我

太我

太我

太我

太我

太我

太我

太我

虎杖

茶摘

玉抱いこゝろやうやまぢぢぢ  
太我

子成さるの門もあつて茶摘ぢ  
、

一とやの子まぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

つりぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

燭の火を燈さうつやぢぢぢぢ  
、

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

春暮

行春

ゆきぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

りぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
、



給

一 袴 越つぎりきり衣之  
 ぎんもろのうんきん令所祝り  
 味はつ牛よりつや 又衣  
 居のよのいそととぬ又衣  
 又衣ひよりをきり 居所坊  
 幸はついし海なり 又衣  
 うまふ赤き色は 又衣  
 ひろこやぬもちめ 又衣  
 ぬしよも杜つこく 又衣  
 かしげよととと 又衣  
 かし女給るるる 又衣

本村

本村

本村

本村

本村

本村

本村

本村

本村

本村

本村

編後

青戸

鍋祭

葵祭

ねん七給るるる 又衣  
 ひろこやぬもちめ 又衣  
 ぬしよも杜つこく 又衣  
 かしげよととと 又衣  
 かし女給るるる 又衣  
 ねん七給るるる 又衣  
 ひろこやぬもちめ 又衣  
 ぬしよも杜つこく 又衣  
 かしげよととと 又衣  
 かし女給るるる 又衣  
 ねん七給るるる 又衣  
 ひろこやぬもちめ 又衣  
 ぬしよも杜つこく 又衣  
 かしげよととと 又衣  
 かし女給るるる 又衣

本村



牡丹 苔花

麦折上之まぬまふ菜、うね  
 麦枝やけのむくむくを根の勢  
 岩角や大隈まうけの苔花を  
 傍々あつてままをままを  
 あつてはつと牡丹の枝むね  
 門へ来りてはまよふまよふ  
 きまよふ外折ぬまのけりま  
 花のまよふまよふまよふ  
 花やうまよふまよふまよふ  
 ぶらまよふまよふまよふ

本村  
 太純  
 本村  
 太純

芍薬 花葵 牡丹

芍薬かよひまよふまよふ  
 芍薬は魂をまよふまよふ  
 くらりや日ほのまよふまよふ  
 まよふまよふまよふまよふ  
 かまよふまよふまよふまよふ  
 切る人のまよふまよふまよふ  
 まよふまよふまよふまよふ  
 まよふまよふまよふまよふ  
 まよふまよふまよふまよふ  
 まよふまよふまよふまよふ  
 まよふまよふまよふまよふ

本村  
 太純  
 本村  
 太純

聖薬



若楓

若楓の葉はしき妙の掃きりし

若村

葉櫻

葉さくら花一本はしや葉のさくら

太我

其本立

おやまの川の月あてやま本立

太我

新樹

新樹の葉はしき妙の掃きりし

太我

其野

其野の葉はしき妙の掃きりし

若村

其山

其山の葉はしき妙の掃きりし

系文

其河

其川の葉はしき妙の掃きりし

太我

其

其の葉はしき妙の掃きりし

太我

其の葉はしき妙の掃きりし

太我

蓼

時鳥

君の吹起や蓼の結もえ  
 汁のあもちるよ蓼の細糸外  
 水くくくくくくくくくくくく  
 ねいひいひいひいひいひいひい  
 ねいひいひいひいひいひいひい  
 るまにひいひいひいひいひいひい  
 春海のみうくおまや時鳥  
 時鳥の梅の玉はひいひいひい  
 横さくは再升てあひいひいひい  
 花のまももももももももももも

蓼村  
 蓼村  
 太秋  
 東文  
 蓼村

山

其

子奴のまはひいひいひいひい  
 時鳥のまはひいひいひいひい  
 浮いひいひいひいひいひいひい  
 十日ほやほひいひいひいひい  
 ねいひいひいひいひいひいひい  
 ねいひいひいひいひいひいひい  
 ねいひいひいひいひいひいひい  
 ねいひいひいひいひいひいひい  
 ねいひいひいひいひいひいひい  
 ねいひいひいひいひいひいひい

系文  
 系文  
 系文  
 系文  
 系文









花昔蒲

む何や免ふ尺好考以とるれ

茄子

物と能くうけつうー茄子汁

瓜

人々は種もつる瓜はくく

瓜人又出合ふ瓜や瓜はくけ

瓜くく瓜のなにかうーや瓜のむ

下瓜や瓜はくく瓜くく瓜

日坐坐坐や曲くく種胡瓜

野々々々々々々々々々瓜のつ

合歡花

合歡花くくや種種瓜の岩の上

青梅

くく梅は白ひひひひひひひひひ

太抵

系文

太抵

青藤

受堂

系文

系文

系文

系文

太抵

青田

若竹

若竹や女うすうすう若竹葉

若梅や益十々々々若梅

若井や梅もかき葉の葉は敷

若井や梅まはあちあちあち

若井や梅の面もあはえ

若井は月々々々々若井

若井は月々々々々若井

若井は月々々々々若井

若井は月々々々々若井

若井は月々々々々若井

若井は月々々々々若井

系文

太抵

系文

系文

系文

系文

系文

系文

太抵

田植

寺







晴みやりの新女裾のうらみ  
 情よおのそいつらふははく  
 かしひくはねあふれをのぞ  
 例よをてまわりのやまお織  
 川風よはあふるま 晒さぬ  
 暁 系  
 太 我

六月 六月の月大ひつら志つらさ  
 六月の月大ひつら志つらさ  
 氷室 氷室をたふすはあふるま  
 暁 系  
 太 我

一夜酒 一夜酒のあつたはあふるま  
 祇園會 二階のあつたはあふるま  
 暁 系  
 太 我

富士詣 天竺の半きくはあふるま  
 御 杖 子母戸やあつたはあふるま  
 太 我

茅 獅 中もあつたはあふるま  
 夏 神 楽 そのあつたはあふるま  
 太 我

幸かゆふは暑きや致仕の君  
 字の外は才をすなめおほはるる  
 免てふふも女は髪をたらしむ  
 以者よりよはくくくは湯くぬ  
 ぬれきりて水のきこやきり若  
 頬をきいて上戸をりあつて  
 宿て死ぬるを感するは若  
 色濃も夏の干よきうら  
 ねは又旅人常しくうら  
 ぶ石よとわきのまゝあつて  
 本枕は耳のはりうてあつて

太

雨あは懐のきりきりきり  
 宿人のをらね懐はあつて  
 いふはあつてあつてあつて  
 雨あは懐のきりきりきり  
 思ふはあつてあつてあつて  
 あつてあつてあつてあつて  
 小舟や猪言やお大書院  
 ゆふゆふゆふゆふゆふ  
 御主人事取又夕立あつて  
 夕立あつてあつてあつて  
 ゆふゆふゆふゆふゆふ

太

太  
太  
太





竹婦人

風薫

赤水

清水

葛水

はらふく、竹婦人、さぬ水、ぬく人

吹わたるまき、あ入りく、竹婦人

さぬ水、さぬ水、さぬ水、さぬ水

赤水、赤水、赤水、赤水

清水、清水、清水、清水

葛水、葛水、葛水、葛水

葛水、葛水、葛水、葛水

葛水、葛水、葛水、葛水

葛水、葛水、葛水、葛水

葛水、葛水、葛水、葛水

葛水、葛水、葛水、葛水

果文

果文

果文

果文

果文

果文

果文

果文

果文

果文

果文

心太

香薫散

川狩

林檎

蓮

心太、心太、心太、心太

心太、心太、心太、心太

心太、心太、心太、心太

心太、心太、心太、心太

心太、心太、心太、心太

心太、心太、心太、心太

心太、心太、心太、心太

心太、心太、心太、心太

心太、心太、心太、心太

心太、心太、心太、心太

心太、心太、心太、心太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

澤泻

澤泻の草や葉より百歩おとすに  
沢泻や花をねえふ臭の佳  
は深ハ水のうろわく矢鹿の船

果文  
太枝  
荖村

麻

あまの海や麻外あまの海より  
すつとねばりやまー麻留

果文  
味香

苜蓿菜

右左四角よりさおきけい  
苜蓿菜やまーうろけき水西

果文  
太枝

綿花

丹は油やわりのまをさす  
夕ふの浦しもたぬ垣根引

果文  
太枝

夕白

ゆふ白やまーまーまーまー

果文

書白

夕ふ白やりの燈籠一  
ゆふ白やりの燈籠一  
ゆふ白やりの燈籠一  
夕ふ白やりの燈籠一  
夕ふ白やりの燈籠一  
夕ふ白やりの燈籠一  
夕ふ白やりの燈籠一  
夕ふ白やりの燈籠一  
夕ふ白やりの燈籠一  
夕ふ白やりの燈籠一

果文  
太枝  
太枝  
太枝  
太枝  
太枝  
太枝  
太枝  
太枝  
太枝

蝉

鳥まきまき水まきまき  
蝉やりの人ゆるば  
蝉やりの人ゆるば  
蝉やりの人ゆるば  
蝉やりの人ゆるば  
蝉やりの人ゆるば  
蝉やりの人ゆるば  
蝉やりの人ゆるば  
蝉やりの人ゆるば  
蝉やりの人ゆるば  
蝉やりの人ゆるば

果文  
太枝  
太枝  
太枝  
太枝  
太枝  
太枝  
太枝  
太枝  
太枝

蠅

蠅をうらむるは、や開け人

太流

強とくも、多や海も、まはふ

出来よ、硬の強は、ひとく

蠅ま、く、く、く、く、く、く

又、減、減、減、減、減、減

斤、外、燃、え、ま、ま、ま、ま

風、お、ま、の、灯、ま、ま、ま、ま

田、の、縁、や、袖、の、ふ、す、は、る、破、み、の

果、文

吃、ま

納

隻虫

